

【講演会記録】

小中一貫教育の現状と課題 ——義務教育学校運営の経験から——

The Current Situation and Issues of Combined Elementary and Junior High Schools:
Through Experiences of the Administration of Compulsory Education

後藤徹也*

GOTO, Tetsuya*

1. 神戸市立義務教育学校港島学園の紹介

ご紹介にありました神戸市教育委員会教育次長の後藤でございます。あらためて簡単に自己紹介から入らせていただきます。私は 20 年以上、神戸市教育委員会におりまして、主には教育施策の企画立案の仕事に携わってきました。その間には神戸市の東の端、阪神深江駅近くにある東灘小学校で校長経験もがございます。それからご紹介にありましたように港島学園の設置に関わりまして、その準備段階から 4 年間、学園長時代の 3 年間を含めまして、この港島学園に関わらせていただいたということです。本日はそのときの経験に基づき、「小中一貫教育の現状と課題」についてお話をさせていただこうと思います。

写真は 3 年前の学園開校時に、9 学年がそろいました集合写真です。これを最初の絵として使わせていただきました。お手元には資料として、レジュメと学校要覧とを用意しています。いただいたスケジュールでは 2 時半までお話をし、残りの 5 分間で質疑応答と聞いております。そのペースで進めさせていただこうと思います。

目次では、最初に学園の紹介を簡単にいたします。今日は 1 年生の皆さんが来られるということでしたので、制度としての義務教育学校の立て付けがどのようになっているのかを、教科書的になりますけれども、少しご説明させていただきます。そのあと、今日のお話の中心になりますが、港島学園での実際の取組と成果についてお話しいたします。さらに今この義務教育学校が直面している現下の状況、課題について概観をした上で、最後に港島学園の今後の方向性についてお話を進めていきたいと考えています。

それでは 1 番、神戸市立義務教育学校港島学園の紹介から入らせていただきます。港島学園は、神戸市にあります人工島のポートアイランドの中にあります。そこでまず、ポートアイランドについてご紹介をさせていただきます。

赤い星印は神戸市の中心、三宮です。その真南にあるのが人工島のポートアイランドです。枠で囲んだものがポートアイランドの中でも、第一期は最初に埋め立てが

完了した部分です。これは 1981 年に完成しています。1981 年といいますと、ご記憶の方もいらっしゃるかもしれませんが、「ポートピア (PORTOPIA) '81」という地方博の先駆けとなったイベントが開催された年です。さらにその南側に続けて、二期が 2010 年と最近完成しています。さらにその南側に神戸空港島が、二期に先立つ 2006 年にすでに開港しています。

実は義務教育学校といいましても、基本的には小中学校と同じように校区が指定されているということで、一期、二期、空港島のすべてが港島学園の指定された校区となっています。と申しましても二期と空港島には住宅はまったくなく、子どもたちはもっぱら一期の中から通ってくることになっています。

簡単に島の概要について申し上げます。これは神戸港内に造られた人工島で、すべての都市機能を一通り備えています。大阪やあちこちにできていますけれども、日本の中では最先発の海上都市となっています。一期には 7000 戸の住宅のほか、国際会議場、ホテルや 4 大学のキャンパスが集積していて学園都市としての側面も持っています。二期には「神戸医療産業都市」ということで、数百社の医療関連の企業が集積しています。また、そのかわりには「スーパーコンピュータ京」というスパコンがございます。ちょっと変わったところでは固有名詞を出すのはいかがかと思いますが、神戸どうぶつ王国も最近非常に人気を博しております。そんなバラエティーに富んだ、さまざまな都市機能が立地をしています。

ちなみに神戸空港は年間の航空旅客数が 310 万人ということで、地方の管理空港としては 65 か所の中で 1 位ということで、たいへんよく利用されている空港となっています。

こちらがポートアイランドの第一期です。点線で囲みましたが港島学園が立地しているところで、第一期のど真ん中に立地をしています。全体で 4 ヘクタールと、非常に恵まれた環境にあると言って差し支えないかと思います。

* 神戸市教育委員会次長、神戸市立港島義務教育学校前学園長

点線部分を拡大します。教育課程上、法律上は前期課程ということですが、本校では小学部と呼んでおり1年生から6年生です。右手にありますのが後期課程の中学部で、7年生から9年生の3学年となります。さらにその南手には、港島幼稚園が3年保育をしています。この幼・小・中が一つの敷地の中に同居していることが、特徴と言っていると思います。そして小学部の校舎と中学部の校舎の距離は70mです。

皆さんがどういうふうにお感じになるか分かりませんが、小学部も中学部も職員室は2階にあります。例えば小学部から中学部のほうに移動しようとしますと、私も何回か測りましたが、ドア・ツー・ドアで5分弱、往復で10分弱かかります。いま過密化している教育課程の中で、10分間は非常に大きなものです。そのために子ども同士、あるいは教員同士、そして子どもと教員の相互の関わりに制約が生じてしまっているのが現状かと思えます。この点につきましては、のちほどまた触れさせていただけるかと思えます。

さて、港島小中学校の沿革について簡単にご説明いたします。昭和55年度(1980年)、ポートアイランドの街開きとともに開校いたしました。当時の小学校の児童数は50名、中学校の生徒数は17名、このような小規模からのスタートになりました。それが11年後の1991年には、なんと港島小学校が日本一の学校になりました。何が日本一かと申しますと児童数です。最初50名でスタートしたのですが、11年後には1800名近い児童が通う学校、児童数では日本一の学校にまで子どもの数が急激に増えていきました。そこから4年後に阪神淡路大震災が起きました。島の中の住民の方3500名が避難をされて、避難所の機能がなかなか解消されず、本当に大変な苦難の時代だったとお聞きしています。

それから14~15年が経過をし、ここから一つの島の中に1小、1中が隣接しているという立地であることから、地の利を生かして神戸市の中でも本格的に先頭を切って小中連携の取組、「指定」と書いていますが、これは神戸市教委からの指定を真っ先にいただきました。早速その次の年には、小中の合同運動会を開催しています。23年度には、モデル地区の取組を発展させて教科拠点地区として、英語と算数・数学で一貫カリキュラムの研究をしていました。それから小中の合同音楽祭を開催したり、今度は小中一貫モデル校に指定されました。このようにさまざまな取組を積み重ねた中で、平成28年度には学校教育法が改正になり、義務教育学校の設置が各自治体の判断で可能になりました。このタイミングでいち早く、神戸市以外の21校と合わせて真っ先に義務教育学校に移行しました。

2. 制度としての「義務教育学校」について

それでは義務教育学校とは、いったいどういうものかを次に説明していきたいと思います。少し教科書的になりますが、義務教育学校というのは、6年間の前期課程から3年間の後期課程まで、9年間の義務教育を一貫して行う学校であるということです。これは学校教育法上の一条校、すなわち幼稚園から小中高、中等教育学校、特別支援学校、大学、高専と、校種があったわけですが、そこにさらに義務教育学校という新たな校種が加わったということです。

そして前期課程は小学校の、そして後期課程は中学校の教育課程をそれぞれ準用しています。準用しているということは、つまり教科書も基本的には小中学校で使うものと同じであるということになります。ただし、これには法律上の特例がございまして、それまでは文科省の指定が要った教育課程上の特例措置を、学校長の判断で行えるようになりました。例えば教育課程を前倒しして、本来中1で履修すべき事柄を小6の間に履修してしまうことが可能になりました。あくまで制度上可能になったということで、実際にやるかどうかはまた別の話です。現実には転校とかございますので、少しハードルが高いのではないかと私、個人的には思っております。それから小中同様の校区の指定があります。

もう一つ強調しておきたいのはここに書いていませんが、免許のことです。義務教育学校の教員というのは、小学校の教員免許と中学校の教員免許の両方を有する者でないといけないというように、免許法には規定されています。しかし当面の間は移行措置として、両方の免許がなくても大丈夫とはなっています。実際港島学園の教員は両方の免許を持っている人間が、他の神戸市内の学校よりは多くなっているという状況です。

肝心なのは、なぜこのタイミングで義務教育学校が制度化されたかということです。3点が言われています。

1点目は、学校の楽しさや教科の好き嫌い。例えば「算数が好きですか」「国語が好きですか」と聞くと、「好きだ」と答える子どもの割合が、小学校5年生でガクッと低下することが統計上明らかになっています。それから古くから言われていますように、戦後すぐに6・3制が導入されたわけですが、2年ぐらいこの発達段階が前倒しになっています。小学校5年生、6年生になりますと、もう思春期に入っていくという状況があること。

それからこれもよく言われますが、学級担任制から教科担任制への移行、あるいは学習進度の加速化。中学校になりますと、学習進度が格段に上がるわけですので、そういうことに起因いたします「中1ギャップ」。そしてそのことから不登校や問題行動が、中学校になると一気に増える。こういうことを制度的に少しクリアしてこう、という意図をもって義務教育学校は導入されたと言われています。

さて義務教育学校は平成 28 年度に制度化されましたが、設置数の推移を見ていきたいと思います。青の棒グラフは平成 29 年度に文部科学省が全国の学校を調査し、28 年度には港島学園を含めて 22 校、29 年度には 48 校となりました。ここまでは実数ですが、30 年度には 73 校が移行の予定である。この時点ではそう答えられていて、その後順々に増えていき、令和 5 年度には 100 校になるというのが 29 年度の調査結果でした。えんじの棒グラフにありますように、すでに平成 30 年度には文科省の推定値を超えて 82 校が移行しています。令和元年度の数字は 8 月中には文科省から発表されると言われていますが（筆者注；94 校移行済）、いずれにいたしましても文科省の推計を超えるスピードで、義務教育学校の設置が進んでいるということです。

さらに注目すべきは備考のところですが、これは施行規則に規定されていますが、義務教育学校に準ずるものとして、小中一貫型小学校・中学校と。これは別々の学校ですけれども、先ほど申しましたような教育課程上の特例措置などが受けられる。つまり義務教育学校に準ずるものとして、制度上位置付けられている小中一貫型小学校・中学校というものが同時に設置をされました。これが平成 28 年度では 165 校でしたが、令和 5 年度には 525 校に増えるだろう。義務教育学校の設置数が想定より増えていますので、こちらのほうももう少し増えていくかと思います。両方を合わせますと相当な数の小中一貫校が、これからどんどん立ち上がっていくと想定されているところです。これが現在の義務教育学校の状況です。

3. 港島学園の取組と成果

実際に港島学園でどのような取組が行われているかを、これからご説明を順々に進めさせていただきます。これが港島学園の運動会です。6 月に実施していますが、その開会式で小学生と中学生が並んで整列をしています。足元に注目していただくと、これは中学部のグラウンドで人工芝になっており、全面グリーンです。ちなみに小学部のほうは天然芝で、「シバタン」と呼んでいます。学園中が緑の芝で覆われているというのが、本校の学校自慢となっています。

子どもたちの体操服に注目していただきたいと思います。学年ごとにカラーを分けています。これは 3 年前ですが、薄紫の服を着ているのが当時の 3 年生で、今は 6 年生になっています。放課後よく体操服で島の中を走り回っているわけですが、体操服で歩いていると、どの学年の子なのかひと目で分かってしまう。生徒指導上も私どもとしては、これは非常に具合がいいということです。

これは今年の運動会の様子です。左上の写真は開会式を終わり、はじめの体操です。これまで 3 年間、開会式

は私が挨拶をしていましたが、今年は観客の一人として少し寂しい思いを持ちながら、テントの中から見学をしていたわけです。右隣にありますのは、小学校 5 年生、6 年生の騎馬戦です。教員がついてやっていますが、すべての競技で小学部の教員と中学部の教員が一緒になって補助をしている。これが港島学園での一つの特徴だと思います。

これは 10 月下旬に行われます文化発表会のひとコマです。午前中は小学部の音楽会、午後は中学部の音楽コンクールです。これと並行しまして、図工科でありますとか、技術家庭科の作品展示も行っています。これは土曜日ですので、もっぱら保護者向けです。この 3 日ほど前にはプレイベントとして、児童生徒音楽会でお互いに見合う、聞き合うこともやっています。これはいい取組だと思っています。中学生が小学生を見ますと、非常に微笑ましいな、という目で見ています。一方、小学生は中学生のりりしい姿の全員合唱を、完全に憧れの眼差しで見えています。とてもいい光景だと思っています。

続いて先だって 7 月 1 日から 4 日間、小学部の体育館で行われた全校造形作品展の様子です。これも 1 年生から 9 年生の作品を一堂に展示しています。黄色い帽子をかぶっている子たちは、お隣にありますポートピア保育園の園児の子たちです。港島幼稚園の子たち、ポートピア保育園の子たちが造形作品展を見にくるわけです。1 年生の作品の横に 9 年生の作品が置かれていますので、ひと目で 9 年間の子どもの成長過程を目の当たりにすることができます。私もよく思っていたのですが、言葉を変えますと、「子どもって、9 年間でこんなにも伸びていくんだな」ということが一目瞭然です。あらためて子どもたちというのはこんなにも伸びていく存在だ、ということが実感できる得難い機会になっていると感じています。

続きまして校内組織について触れていこうと思います。左上のほうに小学校のときの校章と中学校の校章がございます。それぞれ 36 年間の歴史を背負った小学校、中学校の校章です。そして校歌もありましたが、これらをなくしました。新しい校章、そして要覧にもございますが、学園歌を制定しました。正直申しまして義務教育学校の移行時につきましては、保護者の方も港島で生まれ育った人たちが多くて、「なぜ自分たちが慣れ親しんだ校歌、校章をなくすのか」と、ずいぶんおしかりも受けました。今はさすがにそういった声は減ってきております。

職員組織に目を転じていただきたいと思います。学園長 1 名と書いていますが、バツェンをつけさせていただきました。この 3 月末をもちまして私は学園長の職を解かれました。解かれましたというのは、結局 3 年たって学園運営が軌道に乗ってきたと。もともと学園長というのは、法律上の規定は一切ございせん。権限を持っ

ているのは校長であり、神戸市で初めての取組ということで、あえて学園長を置いていたわけです。要覧にも載っていますが、校長それから組織の概要を見ていただきますと、総括副校長は校長級でございます。校長が学園の統括と、中学籍ですので中学部の統括をしています。総括副校長は、小学籍の校長級でございまして小学部の統括をする。従いまして校長経験者が3人おりましたけれども、今は3人体制から校長と副校長とでマネジメントをしている形になっています。

下のところ、学園組織です。教務・企画運営部、学習指導・研修部、生徒指導部、事務部の4部体制を敷いています。合同職員会議、世話係主任会を月1回のペースで開催をする。それから共通のグループウェアで、常時情報のほうは共有させていただいています。このように一体的な運営が図られています。

その上は児童生徒数です。少し古くて2年前の数字です。1年生から6年生の小学部570名、7年生から9年生の中学部222名、合わせて792名です。6年間の前期課程が終わりますと、いったん修了式ということで修了証書を渡しております。他の小学校がやっている卒業式よりはずいぶん簡素化していますが、一応修了証書授与式はきちんとした形でやらせていただいています。やはり転出入がありますので、区切りはつけさせていただいています。

続きまして教育課程上の特徴的な取組につきまして、順々にお話をさせていただきます。本校は学力向上を最優先にして、できる限りの手立てを重層的に打ってきています。

まず小学部における一部教科担任制ということで、これは4年生以上で部分的に実施し、徐々に手厚くしています。それからこれは本校オリジナルのネーミングですが、共動授業といいまして中学部の教員が小学部に出向いて、小・中の教員でTTを行っています。現在は6年生の算数、理科、英語活動、来年から教科としての英語になるわけですが、この3教科領域で行っています。

もう一つは小学部での定期考査を、各学期末に5、6年生で実施をしています。この意図としては集中して勉強する習慣を、早い段階で身に付けさせようということです。これが同時に中学部に向けての準備にもなるということで、保護者の方からたいへん好評をいただいていると、われわれとしては認識をしております。

中学部にいきますと少人数授業ということで、数学・英語で一部習熟度別授業として展開をしていること。放課後学習ですが、小学部は毎週月曜日に必ずやっています。6時間目、7時間目で設定をしています。中学部は定期考査前1週間程度ですけれども、9年生については例年二学期から木曜日に、加配の教員を活用して実施しています。当然長期休業中には、10日間以上の補充学習

を実施しています。

要覧をご覧くださいと思います。昼休みの終わりにパワーアップタイムを帯で15分間程度設定しています。ここで漢字・計算等の基礎的スキルの反復練習をしています。中学部のほうでは、併せて社説を写す取組なども実施しています。

特徴的な取組（その2）です。小学部における英語・英語活動です。義務教育学校では独自の教育課程の上乗せができますので、1&2年生の10時間を独自に上乗せしています。現在来年に向けての移行期間ということですが、移行期間後の35時間、70時間という時数で、現在もこの英語活動は実施しています。これについては中学部の英語教員が小学部に参りまして、それとALTと学級担任とで授業展開を行っています。

部活動は5&6年生の希望者が、週1回程度中学部において体験活動を行っています。

もう一つ特徴的なのが日本語指導です。本校には約20か国、今は二十数カ国になっていると思いますが、60名の外国にルーツを持つ児童生徒が在籍しています。約1割の児童生徒が、外国にルーツを持つ子どもたちとなっています。この日本語指導に関わりまして小学部での児童生徒支援加配教員と、中学部では英語科の教員が合同で指導しています。

実は校区内に神戸大学の留学生会館があることも、事情として作用しています。それからポーアイ二期に医療産業都市がございしますが、その研究者として海外の方が勤務されていて、近くにお住まいになっていることもあります。中にはブルガリア語、ウズベク語やウルドゥー語など、非常に希少な言語の話者もいるわけです。そういう子たちを支えるために、県の制度で多文化共生ボランティアの人たちが週に3回ぐらい来てくれます。あるいは神戸市独自の支援ボランティア制度もございしますが、授業中の取り出しであったり、放課後の母語による日本語指導であったり、あるいは保護者支援も含めてさまざまな活動を展開しています。

いちばん下は特別支援学級です。こちらは月に1回程度は合同作業を行っています。ちょうど中学部の先生が家庭科の免許をお持ちなので、よく調理実習を行っています。例えばポップコーンを作ったり、クレープを作ったり。私も必ずこれには参加させてもらって、ご相伴にあずかっていたわけですが、子どもたちもとても楽しみにしておりました。昨年、クリスマス会などをやりますと、当然私もサンタクロースになりましてサプライズで参加するわけです。高学年の子たちには学園長ということがばれておりますので、逆にからかわれたりということもございました。

具体的に見ていきたいと思います。基礎基本の徹底ということで、数学科の少人数習熟度別指導について少し

申し上げます。こちらのほうは基礎コースで、子どもの数は5人しかおりません。こちらのほうは発展コースで、これも10人程度でやっています。こちらのほうは数学の教員と非常勤の教員、TTとで展開をしています。2クラスを4つのグループに分けて実施しています。ただし常時やっているわけではなく、単元や場面に応じて行っています。

それから昼休み後のパワーアップタイム。中学部はこのとき読書をしている場面です。小学部のほうでは計算問題に取り組んでいます。いずれにいたしましても気分を切り替えて集中力を養う、という意図でもって実施をしています。

それから放課後の補充学習です。主には漢字や計算というスキルの反復学習が多いのですが、たまには鉄棒教室などにも取り組んでいます。きょうから神戸市の小中学校でも一斉に夏休みに入りましたが、中学部は10日間以上、集中して学習会をやっています。

ここで少しご紹介したいのが「力のつく授業—神戸方式—」です。1単位時間の基本パターンを提示しています。①の導入で、めあてをはっきりさせる。②の展開の部分で個の学び、協働の学びと進みまして、最後にふり返るということです。それを念頭に置いていただき、こちらのほうは小中教員による共動授業になります。②の展開の場面の5&6年生で、子どもたちが考えを交流している場面に小中の教員が関わっています。こちらのほうは中学部の数学の教員、一方こちらが小学6年生の学級担任です。ここから進み、まとめの時間になりますと、中学部の教諭から少し発展的な課題を提示して、考えを深めていくという取組をしています。ちなみに写真に写っている両名とも、小中の両免を持っています。もっとも小学校のほうは英語と小学校免許ということですが、両方の免許を保有しています。

それから逆パターンとしまして、小学部の教員が中学部に行くパターンもあります。共動授業の逆パターンですが、小学部の教諭は当然中学部の子たちの顔は、6年間関わっていますので、みんな知っているわけです。従いまして授業の展開がスムーズにいくことは強調しておきたいと思います。校内研修もいま非常に大切にしているところです。研究協議については小中の教員が共に机を囲み、お互いの考えを練り合わせ、すり合わせしているということです。

さて、いよいよ来年から新しい学習指導要領が施行されます。本校では昨年度より「特別の教科 道徳」を、校内研修の柱として位置付けました。その理由には3点あります。1点目は、本校の児童生徒の実態に即していること。例えば「挨拶できない」「ルールを守れない」という指摘も保護者からいただいていますので、豊かな心をはぐくんでいきたいという意図がございます。それか

ら「考え、議論する道徳」の実践が、次期の指導要領への対応の先駆けとなること。それから何より中学部は教科担任制ですが、道徳というのは小中の教員が足並みをそろえて取り組める特色があります。そこで道徳を校内研修の柱に位置付けたということです。

具体的には毎月第二水曜を全体研修の日と位置付けをし、毎週木曜日1時間目に中学部ではローテーション授業を交代でやっています。昨年全中の道徳教育研究大会（兵庫大会）があり、会場校として全学級公開授業に取り組みました。本校の特色を生かして、「国際理解」を共通の内容項目として取り組みました。これが半年前の昨年に行われました公開授業の様子です。本当にたくさん参加者の方が、全国各地よりご来校いただきました。

右側は授業の様子です。小集団に分かれて、まさに主体的・対話的な学習を展開していきました。ある教室ではこのようにALTを含むTTにより、国際理解・国際親善を主題として授業実践を深めていきました。公開授業の研究協議では、私のほうから全体説明もさせていただきました。

縷々、取組をご説明いたしました。でも、こういった取組が本当に子どもたちの力になって還元されているのかを、ぜひ検証して改善していく必要があるということで、半期に1回、保護者アンケートを実施しています。時間が押してきましたので細かくは申しませんが、2年間でどのアンケート項目も軒並み大幅に改善をしていることは申し上げておきたいと思います。

もう少し具体的に開校以来の成果を見てみます。まず何より児童生徒数です。少子化の時代ですが、これが開校から3年間でかなり増えてきました。9年生は2クラスですが、今の小1は4クラスにまで増えてきています。実はかなり大規模なマンションが2棟できて、300戸ぐらい供給されており、非常に売れ行きもいいようです。下世話な話ですが、マンションのPRパンフレットを見ますと、「兵庫県下で初の小中一貫教育をやっている港島学園、充実した環境だ」ということも申し添えられているということです。

右側、神戸市では小学4年生から中3まで、毎春4月に悉皆で学力調査を実施しています。これにより学校ごとのデータをすべて把握しているわけです。従いまして港島の生徒の神戸市の中での学力の相対化ができるわけです。今年の春に卒業した9年生、27年度は小6でした。6年生、7年生、8年生、9年生と。過度な序列化につながることで一切、生の点数は公開していませんので、ここも空欄でおかせていただいています。ざっくりとした傾向でいいますと、このように毎年改善しています。これは同一集団ですので、かなり学力がついていっていることが、数字の上からも明らかになってきているのではないかと考えています。そしてこの春、多くの9年生が

自らの希望進路の実現を果たしてくれたということで、たいへん喜んでいただいているところでございます。私どもとしては着々と義務教育学校としての成果は上がってきているのではないかと、自己評価をしているわけでございます。

4. 「義務教育学校」をめぐる現下の状況

次に義務教育学校をめぐる全国的な課題です。一つは施設設備の形態ということがあります。大まかに言いますと、一体型、隣接型、分離型に分かれています。港島につきましても隣接型ということになります。多くは申しませんが、当然一体型のほうが、パフォーマンスがよくなっているということです。冒頭申しましたように子ども同士の交流、教員同士の交流、そして子どもと教員との交流ははるかに一体型のほうが図れやすいことが、学習上の成果となって表れているのではないかとということです。従いまして今後義務教育学校に展開している学校というのは、施設設備をどうしていくのかが一つの課題ということです。

そしてもう1点、非常に大事なことです。先だって中教審への文科大臣の諮問がなされました。これは非常に注目すべき諮問です。4点ありますが、1点目と4点目で申します。ここに書いてあるとおり、9年間を見通した子どもたちの発達段階に応じて学級担任制と教科担任制のあり方を検討していく。これとはコインの裏表の関係になりますが、免許のあり方をどうしていくのか、そして教員の配置のあり方をどうしていくのか。ここを考えてほしいということです。

この諮問がなされた背景には、やはり発達段階の前倒し、そして教科への興味、関心が多様化していること。教師の側でも、よりいっそう専門性が求められる。そしてもう一つが教師の多忙化の問題があります。今のうちに全教科全科目を小学校の教師が教えていたのでは、とても間に合わない、追いつかないということ。従いまして授業準備や学習評価の負担を軽減していく、という文脈の中で位置付けられている。ここが新しいところかと思えます。

小学校の教科としての英語が来年4月から始まりますが、この専門教科の免許を持つ教員が高学年に入っていないと、教科としての英語が成り立たないのではないかとということもございます。結果として今の6・3制が、5・4制あるいは4・5制という形で数居が低くなって、流動化をしていくような状況を視野に入れての諮問かと思っています。強調したいのは、これは義務教育学校の制度化の問題意識とピタッと重なっている、ということが言えると思います。

5. 港島学園の今後の方向性

したがって義務教育学校というのは、今後の中教

審の答申を見通す中でも、まさにパイロットスクールとしての役割を今後担っていくのではないかと考えています。こういったことを踏まえた今後の港島学園の方向性として、4点を挙げさせていただきたいと思っています。

1点目は、児童生徒間・教職員間そして児童と中学部の教員、生徒と小学部の教員の相互間の絆をいっそう深めるために、現状では施設隣接型校舎であって10分間の壁があるわけです。しかし今年度、神戸市のほうから予算措置をいただき、今後港島学園は施設一体型校舎へと全面的に改築をしていくということで、非常にありがたいと思っています。

2点目、ここも強調しておきたいところです。現在、港島学園の異動希望教員は神戸市全体から別枠で募集しています。これはいわゆる手挙げ方式でやっているわけです。したがって小学校の先生だけでも、中学校の教育に興味があるということで、はなから9年間ということに興味を持って港島学園に異動してくれているということで、これも非常にありがたいことだと思っています。今後は小学部から中学部に9年間持ち上がっていくパターンでの、教職員の配置についても取り組んでいけたらと考えています。

それから教科としての小学校英語の必修化などを受けて、小学部における教科担任制については当然のことながら、よりいっそう積極的に展開をしていきたいと考えているところです。

6. 最後に

最後になりますけれども、小学校における小中一貫教育の本校はパイロットスクールであり、今のところ神戸市内に義務教育学校は港島学園1校のみでございます。ぜひ本校の実践の成果を、これから神戸市全体に普及していきたいと考えております。残り2分になっていますけれども、少し補足させていただきます。

冒頭申し上げましたように私、現場での経験もございます。現場で出会いました先生方で、「この先生は非常にいい先生だな。本当に子どもたちにしっかり関わっているな」という先生が何人かいらっしゃいます。こっそりと出身大学を見ますと、武庫川女子大ということが非常に多くありました。これはお世辞でも何でもなく、本当の話でございます。

私の印象ですけれども、非常に基礎基本がしっかりしているというところからすると、かなり大学のほうで鍛えられているという感じを持っています。また学校において非常に研究熱心という印象がございます。そして何より子どもたちが大好きで、四六時中子どもたちのことを考えているという先生方がとても多かったと思います。本学もこの4月に教育学部に移行されて、新たに二つのコースを立ち上げられたということです。これはまさに

私どもにとりまして、時宜を得た設置である、と考えております。

ぜひ4年間の学びの下に9年間の義務教育期間。これは子どもたちにとっては、おそらく最も伸びの大きな期間だと思いますので、9年間を見通して子どもたちの可能性をしっかり育てる。そのような素晴らしい先生方へと成長していただき、欲を申しますと、できましたら神戸市のほうに就職をしていただければ、私どもとしてはこれ以上の喜びはないと考えております。

また先生方とお会いする機会があると思います。そのときを楽しみにしております。ご清聴、ありがとうございます。(拍手)